

運動部活動におけるサーバント・リーダーシップに関する研究

1230537 宮本晃平

指導教員 中川善典

研究背景

私が所属している部活動の顧問が変わったことで、チーム全体の雰囲気が変わった。人的資源管理論の講義の中でサーバント・リーダーシップについて学び、これを用いて現在のチームの状況を打破したいと思い研究を始めた。先行研究においてサーバント・リーダーシップとスポーツや運動組織について調査を行ったが、多くの場合が企業の経営組織について記述されており、運動組織についての記述を得ることはできなかった。

研究目的

先行研究から企業におけるサーバント・リーダーシップの修得と部活動におけるサーバント・リーダーシップの修得は同じなのではないかと考えた。そこで本研究では、サーバント・リーダーシップ修得の学習メカニズムにおけるサイクルは実際に運動部活動の中で観察されるのか。またどういった種類の自己犠牲によってサイクルが回っているのか。そして得られた結論から高知工科大学男子バレーボール部における改善策を検討することとした。

研究方法

運動部所属者・スポーツ経験者を対象とし、Google フォームを利用した自由記述中心のアンケート調査を行った。主な内容は、名前、競技名、競技を始めた学年、エピソードの時所属していた組織（部活動、クラブチーム）の人数。リーダー（監督・顧問・部長・主将）の指導をきっかけとして、チーム全体（自分自身を含む）が変化したり、その変化をリーダーに気づいてもらえたりしたエピソード（少なくとも200字を超える詳しさ）について。エピソードについては、私自身のエピソードを回答例として用いることで積極的な回答を促した。

分析結果

サーバント・リーダーシップ修得のメカニズムにおけるサイクルが運動部活動においても存在することが確認することができた。またそのサイクルは、観察と自己改善という非常にコストがかかる自己犠牲によって回っていることが分かった。

考察・結論

企業と同じように運動部活動においてもサーバント・リーダーシップを修得することは、可能である。その際にリーダーの意志の強さが重要になる。今回の研究を通して、運動部活動において試合で勝利する喜びや達成感だけでなく、サーバント・リーダーシップを修得することができるという付加価値を得ることができると分かった。